

(二) そこで、言語的応答による話材の再生の困難さを除去するため、クレオンで聞かされた話を描かせながら再生的に説明させた。話材は関秀夫作「白いマント」であったが、これは変化の乏しい単調な構成であるとともに、高度の詩的空想を扱ったものであったため、その再生はきわめて断片的なものであった。

(三) したがって、幼児の日常見聞する身近な動物を登場させた櫻葉勇作「ライオンをたべた山羊」を用いた。結果は狼が山羊をたべにきたとか、山羊が新聞をみつけたという、全文脈の特定の場面のみが再生され、特に男児には狼の出現とその攻撃動作、女児には山羊の静かな生活状態の印象が強いようであった。

(四) この動物(狼、山羊)については、既に屢々童話、絵本で経験しているため、この影響がこの場合の再生効果にも及ぼしていると思われた。そこで、動物は登場するが、かれらが自然に遊んでいる情景を描いた川崎大治作「ブランコ」を用いた。(五)更に幼児の生活を扱った小出正吾作「紅雀」を用いた。結果はやはり断片的な人物、事物の単なる再生が多く、全体的な話の文脈によって規定され、体制化されたものではなかった。

結語と考察 再生法自体に問題があるが、幼児に強い情緒的刺激を与える登場人物とその行動か、かれらが日常経験する事物かがよく印象づけられ、作者の意図する詩的、芸術的、保育的表現は、そのままのかたちでは理解されない。従って、実演童話の選択は、実演時の条件は一応除外すると、幼児自身の生活の具体性、時間性、直観性という現実度の高い次元において考慮されねばならないであろう。
(大会発表論文抄録22頁)

幼児の「死」についての調査

駒沢大学 内山憲尚

調査の動機 最近の幼児向き教材(童話・紙芝居・スライド等)

の中には原作の筋を改作して、悪い狼や、鬼などが最後に死んでしまふような話をことさらに改作して、悪い狼や鬼などを死なせないで、謝罪させて仲よしの友達になって一しょに遊ぶというような結末にしているのが多くなって来た。(「七匹の小山羊と狼」「三匹の豚」)或いは原話では慈悲深い爺さんが、宝ものを貰って帰ってくる。無慈悲な婆さんが、真似をして失敗をするというような昔話を、ことさらに、よい爺さんが、宝ものを貰って来て、婆さんと分けるという筋だけでやめているようなものなどがある。(「舌切雀」「団子地藏」等)またひどい紙芝居になると、舌切雀の欲の深い婆さんの貰って来たつづらから蛇や蛙の代りに、雀が数百羽とび出して来て婆さんにおそいかかっているというのがある。

一体幼児は「死」というものについて、おとなが考えるようなセンチな考え方をするものであろうか。

調査の方法 面接説問法により一人ひとりの幼児に答を求めた。まず「死」について年長組一七〇名について

① 死んだらどうなりますか。「わからない」というのが九五%で、殆んど「死」ということに無関心であるということがわかる。

② 死んだらどこへゆきますか。「知らない」という無関心的態度が五八%を占めている。「お寺へゆく」という子どもは、肉親者中

に死者があつて寺へもつてゆくということを直接、経験しているのである。

③ 人が死んだ時どう思いますか。「かわいそう」というのが男児に三〇％あるが、この場合も多分に成人からの影響があつて、幼児自身の感じから真にかわいそうと思う場合は少ないのではなからうか。「だいきらい」とか「死なない」とか「中にはおもしろい」というのさえあつて、死はいやなものであると考へているが幼児の本心から、かわいそうと同情の気持を起すことは特例の子ども以外には殆んどないということもできる。

④ おとむらい(葬式)を見たらどう思いますか。

「わからない」が殆んどで、その無関心状態を示している。

以上の調査を綜合して考へても、幼児は「死」ということについては成人のように、死即センチチというような考へ方を持っていないということがわかる。

次に童話についての調査をやつてみた。即ち「七匹の小山羊と狼」の話を年長組幼児についてアンケートを求めて見た。

① このお話をきいて狼をどう考へますか。

殆んどの幼児が「死んだ方がいい」と答へている。かわいそうだと答へた子どもは一人もいない。

② なぜですか(その理由)

「こわいから」というのが七〇パーセントで多分に、おそろしい即ち悪いという意味を含んでいるのである。ここでも、悪いことをした者は当然死の酬を受けるべきであるという解釈である。

結論 ① 幼児は「死」ということに対して成人が抱いているような、センチメンタルな感じを持っていないということがわかつた。従つて、童話の中で悪いものが「死」ぬということに対して、憐憫

の情などは、わかさない。

② 童話の中で悪いものが亡びるということは当然の結果と考へている。ただ話す場合の死の表現についての扱い方は、簡単に扱わなければならない。特に絵による表現の場合(紙芝居やスライド)には構図については特に注意しなければならない。

③ 童話の場合あまり成人の考へで取扱われないことが肝要である。

④ ことに世界の名作や、昔話などについては一個人の考へでむやみに筋を変えたり改作したりすることは避けなければならない。

(大会発表論文抄録48—50頁)

子どもの実在性について

熊野大神宮幼稚園 青井正子

目的 実在性とは、人間の思考の産物である夢や物の名前等のような非実在物を、自分の外に客観的に存在する物質である、と見なす子ども特有の思考形態のことである。ピアジェはジュネーブの子ども達を対象に実在性の調査をおこなつた結果、社会的な経験を積むに従つて実在性は消失すると述べている。本実験はピアジェの実験方法に準じて幼児・学童を対象に実在性の有無を明らかにし、その消失過程を發達的に検討することと、ピアジェの研究結果と比較すること、とを目的とする。方法は抄録を参照されたい。

結論 (1) 最初に実在性が消失するのは名の起源におけるものであつた。物の創造と命名とを区別するようになる年齢は8・9才頃である。(2) これと前後して消失するのは夢におけるものであり夢を内的なものとするようになるのは9才頃である。したがつて内的な